
キミの秘密を知っている

さや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミの秘密を知っている

【Nコード】

N6272S

【作者名】

さや

【あらすじ】

平凡をこよなく愛し、また己の人生も常にそうありたいと願う女子高生、遠坂舞。

しかし、彼女の希望とは裏腹に、特殊な事情を持ったイケメン達による逆ハーレム状態が形成されていくのだった。

プロローグ（前書き）

常に主人公視点となっております。

ブローグ

私の名前は遠坂 舞。

とにかく平凡ということを愛する高校2年生。

成績だって中くらい、容姿も特に際立ったところは無いいし、性格も日本人によくある長いものには巻かれる感じ。

ゲームやアニメで言うなら、どこからどう見てもモブキャラだ。

将来は中流企業に就職、30歳までには平凡な男性と結婚して、それこそどこにでもあるそれなりに幸せな家庭を築いていけたら…。

なーんてことを夢見ている。

ええ、それなのに。

ああ、それなのに。

…どうしてこうなった。

ケース1 パーフェクト生徒会長

放課後、忘れたノートを取りに学校に戻り人気のない廊下を歩いていると、どこからか話し声が聞こえたような気がして私は辺りを見回した。

すぐ傍の階段下の倉庫前に我が校の誉れと名高い生徒会長の横田先輩がいて、彼が携帯電話を使用しているのが分かった。

一人頷いてそのまま立ち去ろうとした時、急に音量を大きくした会長の話が耳に入ってきた。

「ああ！？つぎっけんじゃねえぞゴルア！

それ以上ガタガタぬかすようなら指の骨の一、二本折っちまえ！」

想像の範疇を超える暴力的な言葉群に驚いて、私は思わず歩む足を止めて振り向いた。

ええっと、私の記憶が確かなら生徒会長は顔良し・性格よし・頭よし・運動神経よし・家柄よしのパーフェクト超人だったと思うんだけど…。

いや、平凡な私の人生には関係ない事だ。スルーしよう。スルー。と、考えを打ち切って顔を逸らそうとした瞬間、携帯を切って振

り向いた会長と目があつた。

私は咄嗟にっこりと笑顔を作つて挨拶をし、その流れで立ち去ろうとしてみた。

「君は確か…。2年の遠坂さん、だったかな？」

逃走失敗。そして何故私の事を知っている。

「ふふ、僕は全生徒の顔と名前を覚えているんだよ。」

あれ、心読まれた？

ていうか、何ですかその記憶量。会長って本気で超人ですね。

「…そんなことより、君さっきの会話聞いてたよね？」

いつもなら輝かしい微笑みも今は冷氣しか感じません。

「何の事が分かりません。

帰りが遅くなつてしまいますので、失礼してもいいですか？」

背中に冷や汗をかきながらも、すつとぼけてみる。

すると、会長は一段と冷氣を放つて先ほどよりも低音で質問を繰

り返した。

「聞いてたよね…？」

「……………はい。」

どうやら大魔王からは逃げられないらしい。

この後、半ばむりやり生徒会室に連れ込まれて私涙目。

「…あの、会長。」

私は会長から解放されるために勇気を出して声をかけた。

「何かな？」

「会長は先ほどの件について人に知られたくないんですね？」

それなら、私は誰にも言うつもりは無いし、例えしゃべったとしても皆信じないと思うんです。

何より私は会長という存在自体に興味がありません。

むしろ、平凡をこよなく愛する私の人生に関わらないで欲しいと思います。

なので、このまま無条件で解放してもらえませんか。」

そう提案すると会長は一瞬ポカンとした顔で私を見た。
直後、大笑いを始めて今度は私が茫然と会長を眺めることになった。

しばらく笑った後、ようやく落ち着いた会長は今度は邪悪な笑顔を浮かべて私を見た。

「…お前、面白いな。面と向かって興味が無いなんて、初めて言われたぞ？」

急に地だと思われる口調で話しかけてきた会長に私は警戒を強くした。

…いい、嫌な予感がするよ？

「そこまで言われたら、意地でも俺に興味を抱かせてやりたくなかった。」

「え…。」

嫌な予感の中う！？

会長はにやにやと笑いながら近づいて来て、私を閉じ込めるように壁に両手をついた。

そして徐に私の耳に顔を近づけて囁く。

「近々、生徒会の雑用員として任命してやる。
せいぜいこき使ってやるから覚悟しとけよ。」

NO——ッ!!

その後、宣言通り生徒会雑用員に任命された私は、いじめのよう
な仕事量と二人きりになるたびにセクハラしてくる会長に悩まされ
る日々を送るようになるのであった。

うわーん！これだからイケメンは嫌いなんだー!!

ケース2 一匹狼な同級生

ある晴れた日曜日の夕方。

自宅近くのビルの建築現場の前の道を通りかかった時に、そこから不可思議な音がしたのでついと目をやった。

そこにはクラスメイトの田崎がいた。

彼は寡黙でどこか影があって、適度にイケメンなのでそれなりに女子にモテる男だ。

あんな場所で何をしているのかと思っていると、現場にあった鉄パイプの内の一本がひとりでに浮かんで、彼の手に収まった。そして、次の瞬間、彼はその場から跡形も無く消え去った。

って、おいおいおい、あれってまさか超能力…。

いや、平凡な人生を望むならこれ以上考えるべきじゃない。スル―しよう。

そんな非現実的な事、あるわけ無いもの。きっと疲れて白昼夢でも見たんだ。

消える一瞬にこっちを見たような気がしたとかそんなの錯覚、錯覚！

しかし、そんな努力もむなしく翌日の月曜日に田崎から屋上に呼

び出された。

しぶしぶ屋上に向かうと、田崎は腕を組んでフェンスに寄りかかっていた。

チラッと確認してみたが、どうやら二人きりのようだ。

彼は自嘲するような歪んだ笑みを浮かべて、静かに話しかけて来た。

「まさか、クラスメイトにバレるなんてな。」

「はあ。」

「見てたんだろ？昨日、俺が能力を使うところを。」

あーあ、言っちゃった。

はつきり能力って言っちゃったよ、この人。

「はあ、まあ。」

「なんだよ、ハッキリしねえな。」

微妙に眉間に皺を寄せて彼は小首を傾げた。
イラッとした。

「田崎君がスルーさえしてくれたら夢でも何でも、とにかく見て

ない方向で自己処理する予定だったんだけどね。」

「は？」

「私は平凡に生きたいの。そういう非常識に関わらせないで欲しいの。」

分かる？」

「…いや、え？」

いきなり逆ギレしだした私に、田崎は困惑しているようだ。
相手がろくに言い返して来ないのを良いことに、私はさらに言葉を重ねる。

「しかも、皆のいるところで堂々と呼び出しなんてするから、きっと一部女子の反感を買ったよ。」

どうしてくれるの？」

「え、と、悪い…っじゃなくて！」

あ、もう持ち直しやがった。

「遠坂…。お前もつとこう、驚いたりとか何とか無いのかよ？」

「そりゃあ、驚いたわよ。現実には超能力が存在したのよ？」

驚くなんて方が無理でしょ。」

「じゃあ、何でそんな普通なんだよ。」

怖いとか何とか思わないのか？」

「はあー？何それ、意味分かんない。何でそうなるわけ？」

「えっ…。あ…。そ、そうか。ああ、いや、別に、それならいいんだ。うん。」

田崎はそう言つと、自分の口に手を当ててあらぬ方向を見た。
何なの??

「とにかく、私の人生の目標は平凡なだから、昨日は何も見なかったって事で、これから先も私に一切関わらないでちょうだい。いい?」

この言葉を聞いた田崎は微妙に渋い顔になった。

「何よ。何か文句あるの。」

「同じクラスなんだから、一切関わらないっつーのは難しいんじゃないの。」

「…ああ、そうね。別に単なるクラスメイトとしての会話なら問題ないわ。」

「ふーん。分かった。」

それ以後、何故か田崎はよく私に話しかけて来るようになった。

しかも他の人間には滅多に見せない笑顔で、だ。

約束が違つと文句を言つたら「クラスメイトとしてなら話して良いと言つたのは遠坂だろう。」と言い返された。

咄嗟に言い淀んだ私に勝利の笑みを浮かべ、彼は今日もまた嬉々として話しかけてくるのだった。

くっそー、いじめが起こったらアンタのせいだかんね！

ケース3 お調子者の後輩

合唱部の合宿中、真夜中に目を覚まし一人でトイレに行った帰りの廊下で、後輩に会った。

ちなみにトイレは外付けで部屋には無いという女子にとって微妙な仕様だ。

「あ、舞先輩。」

「お、植原君。やほー。トイレ？」

「そうッス。先輩もッスか？」

「そうそう。私は帰りだけどね。」

外付けって面倒臭いよね。無駄に目も覚めちゃうしさ。」

彼が同意を示そうとしたその時、雲の隙間から満月が覗いて窓からサツと光が入ってきた。

「ヤベッ！」

「え？」

その直後、植原君はみしみしと音を立てながらその姿を異形のものへと変化させた。

ピンと立った耳、長い鼻面、大きな口とそこからのぞく牙、ふさふさの銀の体毛にゆるりと揺れる尻尾。

絵にかいたような狼男がそこにいた。

人間、驚きすぎると声が出ないということを自ら理解した瞬間だった。

どうみても本物のソレに恐れ慄きフリーズした私に向かって植原君が口を開く。

「あわわ！やべー！いや、ちょっ、先輩、ちがつ、これは違うんすー！！」

……めちゃくちゃに慌てる植原君を眺めていると逆に冷静になってきた件。

ていうか、リアルであわわって言う人初めて見たよ。

「こっ、これはアレッスよ！

あのっ、えー、そう、今度の文化祭の出し物の早変わりッス！！」

「……………」。

「……………」。

その場に気まずい沈黙が流れた。

「…………ええ……つと。ごめん、植原君。
それはちよつと無理があると思う。」
「…ッスよね。」

力無く言つて、植原君はがつくりとうなだれた。

バカなやり取りで完全に平静を取り戻した私は、現状を打破すべく彼に問いかけた。

「あの…、植原君？中身はそのまま植原君でいいのよね？
人格が変わつたりとかしてないよね？」

「あ、はい。そうッス。丸々俺ッス。」

「うん、そつか。でさ、その姿は秘密だつたんでしょ？」

私、見なかつた事にしようか？」

そう言つた私を植原君は理解できないといった顔で見てきた。

「…つか、舞先輩。超冷静ッスね。」

昔、うっかり人前でこの姿になつた時はそれはもう酷い有様だつたんすけど。」

「っあゝ、いや。」

先に植原君がすつごく取り乱してたから、タイミングを失つたというか…。

まあ、今はホラ。中身が植原君のまんまだつたら別に大丈夫かなって感じ？

そういう特異体質って思えば別にどうということはないって言うか。うん。」

「先輩…、それって…。」

「ん？」

「めちゃくちや男らしくてカッケエーじゃないッスか！

マジやべーんスけど！！なんスか、その潔さ！マジやべー！マジやべー！

もうアレッスか！？惚れちゃっていいッスか！？」

「は！？いや、ダメだよ！いきなり何言ってるの！？

ていうか、騒いだら人が来ちゃうよ！？」

「うわっ、そうだった！スンマセン、先輩。」

注意をすると植原君は小声で騒ぐという器用な事をしてきた。

「…アレ？ってか、今俺フられた？

うわ、地味にシヨックなんスけど！

舞先輩、俺のどこがダメなんッスかあ！？」

「え、出来の悪い弟とかペットの犬みたいにしか見えないところ？」

「グハッ！先輩、容赦ないッスね！

しかも狼男に向かって犬みたいとか洒落すぎッス！」

「植原君の感覚がよく分からないよ…。」

とりあえず、私もう部屋に帰るから。

植原君はトイレにでも行って元に戻ってから帰りなね。
じゃ。」

「あつ、先輩！そんなアツサリ！」

まだ何か言ってる後輩を無視して部屋に帰り、何事もなかったかのように就寝した。

その後、植原君は「やっぱり諦めきれないツス！俺、先輩が振り向いてくれるようになるまで頑張るツス！」とか何とか言って、付きまといてくるようになったのだった。

彼が大っぴらな分、周囲が応援ムードになってマジウザいです。

ケース4 気さくな養護教諭

放課後、私はめずらしく保健室にいた。

だからと言って、体調が悪いわけじゃあない。保健委員の仕事だ。

「坂下先生。消毒液の入れ替え終わったので、各教室に配ってきましたね。」

「おー、すまん。」

いやあ、遠坂は真面目に仕事をしてくれるから助かるな。」

「いえいえ、当たり前のことをしているまでですから。」

じゃ、行ってきます。」

はあ、久しぶりの平穩。

ジャンケン負けて一人で手伝いさせられてるけど、逆にラッキーだったわ。

このところ、教室では田崎が休み時間の度に話しかけて来て疲れるし。

昼休みは生徒会の仕事（ていうか、むしろ会長の相手）がキツイし。

部活ではほとんどスルーで対処してるとは言え植原くんが鬱陶しいし。

…で、まともな学校生活を送れていなかったのよねえ。

やっぱり、普通って素晴らしい。ビバ、平凡。ノット、非凡。

ご機嫌で保健室に帰ってくると、先生にお客さん？が来ていた。

と、思ったらそのお客さんが一瞬にして紙に変わって、先生がそれを懐に入れた。

「…っブルータス、お前もか！」

私は自分の運の無さを嘆いてその場に崩れ落ちた。

なんで、私ばかりこんな場面に遭遇しなきゃならないんですかあ！？

私の青い鳥はどこですかあ！？

そして、ようやく私の存在に気がつく坂下先生。
にぶっ！先生にぶっ！

「げっ！遠坂、戻ってたのか！てことは、…今の見たか？」

「見てません。何も見てません。見ているわけがありません。」

私はその他大勢に埋没してしまうことに至上の喜びを感じる平凡を誰より愛する女です。

そんな私が非日常な場面を目撃するなんて、あるわけが無いじゃないですか。

アイラブ平凡。ギブミー平凡。いやむしろ平凡が来い。」

「は？お、おい。…遠坂？大丈夫か？」

そう言って、先生は心配そうな顔になって私の額に手を置いた。

私はそれを間髪いれずに叩き落した。

「触らないで下さい。非凡がうつります。」

「非凡ってうつるもんなのか？」

「そうです。そうして、私の平凡な人生を脅かすのです。」

「ほー。まあ、そんなことはどうでもいいわ。

ていうか、見たよな？」

「しつこいですよ、坂下先生。

何も見てないって言ってるじゃないですか。」

「貫くねえ。

じゃ、その話は置いて。

ちよっと、この紙持ってきてくれ。」

返事をする前に強引に手の平に紙を乗せられる。

そして、次の瞬間。その紙は小さな馬に変化した。

「ひい！」

青ざめる私を前にニタリと笑った先生は、それは楽しそうにこう告げた。

「これで『見た』な？」

にぎやあああ、嵌められたあああああ!!!

「いやあ、ちようどそっち方面も手伝いが欲しいと思ってたところなんだよなあ。」

「…そ、そっち方面で。」

「ん？ああ、陰陽師だよ。陰陽師。悪霊とか妖怪とか退治するアレな。」

「あー！あー！聞こえない！聞こえないーッ！ー！」

とんでもない事を言い出した先生に、耳をふさいで必死に首をふる私。

それに対して何を思ったのか、先生はいきなり私の肩をガツシリと抱いてきた。

わーっ！セクハラだー！ー！

「簡単な雑用してもらっただけだつて。

いいから黙って付き合えよ、遠坂あ。」

「嫌です。お断りします。断固拒否します。」

「っあゝ。担任にあることないこと報告しちまおうかなあゝ。

印象悪くなるだろうなあゝ。内申に響くかなあゝ。」

わーっ！パワハラだー！ー！ー！！

「県に雇われてるような人間が脅しなんてして良いんですか！」「バレなきゃ何したっていいんだよ。」

わーっ！最低だぁー！！！！！！！！

結局押し切られて、私は平日だろうが休日だろうが事あるごとに先生の手伝いをさせられる羽目になったのだった。

それはそうと、最近とみにスキんシップ過多な気がして仕方ないです、先生。

これ訴えたら勝てますかね？

ケース5 天然系外国人

我が家のお隣さんにカミューという名の外国人がいる。

彼は西洋系の整った顔立ちと、朗らかな性格で近所の奥様方に大変人気がある。

勿論、うちの母も彼にご執心だ。

外人なんて非凡も良いトコなんだけど、彼の前で態度を悪くすると母が怒るから、会った時は仕方なく相手をしている。

……………。

まあね！そりゃね！最近の人間関係からしたら人種程度でとかわなくもないけどね！？

っあーもう、放つといて！！

とにかく、そのカミューなんだけど…。

彼は今なぜか我が家にいる。

さらに言つと、私と彼、二人きりである。

えー、早々ネタバレすると、両親が二人で旅行に行ってしまうして、女子高生が一人で家にいるのは危ないってんで母が彼を引っ張ってきたんですよ。

ていうか、その場合カミューに私が襲われる可能性は考えてくれないのですか、母よ。

…あゝ、うん。言ったら鼻で笑われそうだ。

むしろ、逆の可能性の方が高いとか言って注意されそうだな。失敬。

「ごちそうサマでシタ。とても美味しかったデス。

マイさんは良いオヨメサンになりマスね。」

「お粗末様です。

ああ、片づけはしなくて良いですよ。

それより先にお風呂入っちゃってください。」

「そうデスか？それではお言葉に甘えます。」

…しかし、もう何年も日本に住んでるくせに、一向に外人訛りが抜けてないのってどうなのよ。

などと、至極どうでもいいことを考えながら私は食器を洗う。

最後の皿をカゴに入れ、タオルで濡れた手を拭っていて、ふと気付いた。

あゝ、バスタオル出してあげてないや。

ラブコメみたいな展開は遠慮したいので、とりあえず脱衣所の前で耳をすましてみる。

うん、シャワーの音がするし、今なら大丈夫でしょ。

脱衣所の中に入って戸棚からバスタオルを出し、風呂場にいるカミーユに声をかけながら脱衣カゴにそれを持っていく。

「カミーユさん、バスタオル着替えのトコに置いておき…ま……ぎゃああああッ……！」

そこでとんでもないものを見て、私は思わず絶叫してしまった。
その声に反応してボタン！と大きな音を立てて緑色の生物が風呂
場から姿を現した。

脱衣カゴの中には、着替えと一緒にまるで脱皮でもしたかのようなカミーユそっくりの抜け殻があった…。

「…ええ〜っと、要するに。」

カミーユさんは宇宙人で、果てしなく遠い上に宇宙規模で見ると
そう文明も発展していない辺境の地である地球くんだりまでわざわざ
個人で調査をしに来た物好きな学者さん、と。」

「そうデス。」

再びカミーユの皮を被った宇宙人は神妙な顔で頷いた。

「…せめて地球内で完結して欲しかった。」

「へ？」

「あ、すみません。こつちの話です。」

「それよりマイさん、コンな犯罪の片棒を担がセルようナ事を頼む
ノ八大変申し訳ナイのデスが…。」

「えっ！？ななな何でしょう！」

「未開発の原始惑星の住民に正体を知らレルことは軽犯罪に指定さ
レテいまして、ソレが政府に露見スルと私はココでの活動を禁止さ
レテしまっデス。」

だカラどうか、私の事につイテは黙ってイテ貰えナイでショウか。

「…ああ。何だ、そんなことですか。頼まれなくても誰にも言いませんよ。」

電波扱いされるのも、精神病を疑われるのも嫌ですもん。」

「そ、そうデスカ…。いや、アリがトウございます。」

私マダマダこの星で調べタイこと沢山あります。嬉しいデス。」

お礼を言つて、カミーユは満面の笑みを浮かべた。

あ、ちなみにカミーユの皮は彼の星にある一般的な変身キットであつて、人間を襲つて入れ替わつたとかそういう事実は無いらしい。その皮を被るだけで内臓器官の隅々まで人間になれるそうだ。

宇宙道具スゲエ。

そして、その日以降カミーユはしょっちゅう私を訪ねて来ては、自分の故郷についてベラベラと語ってくるようになった。

いやまあ、今まで誰にも言えなかった反動なのかもしれないし、そこは別にいいんだけどさ…。

母の「カミーユ、舞と結婚して私の息子になつて」。なんて冗談に微妙に乗り気みたいない態度なのが非っ常に気になるんですが？
その宇宙人、自重しろっ！！

ケース6 生意気少年

公園を散歩していると、どこからか唐突に少年が降って来た。思わず受け止めるも、重さに負けて尻もちをついてしまう。

「……ったた。あ。君、大丈夫？痛いところとかない？」
「ふん、余計な事を……。この程度、我一人でも対処できたわ。」

そう言つと、少年はスツと立ちあがってこちらを向いた。
つて、うわああああ！やらかした！！私、やらかした！！

生意気なのはまだいい。子供が生意気なのは普通だから許す。
無駄に偉そうなしゃべり方もテレビの影響つて事でギリギリ許容しよう。

だけどっ……、だけど、その顔はダメだ！！
サラッサラの栗色の髪、透き通るような白い肌、長い睫にキリッとした大きな瞳、すっと伸びた鼻筋に形の良いツヤのある唇。
……そう、彼はとんでもなく美少年だった。

それこそファンタジー世界における美の代表エルフと肩を並べる程に。

自分から非凡に関わってどうする、私！！
……ま、まあ、でも、ここで去っちゃえば問題ないよね？

「大丈夫ならいいのよ、おほほ。じゃあ、私はこれで…。」
「待て。」

ひっ！何か呼び止められた！

「必要無かったとは言え、仮にも助けられた身としては礼をせねばなるまい。」

やーっ！やめてよして関わらないでビビデバビデブー！！

そのあとは、強引に彼の家に引っ張って行かれた。
これ、君が少年じゃなかったら犯罪だと思えますよ！？

「ホグツ！ホグツはおらんか！ホグツ！
………チッ、肝心な時に役に立たん奴よ。」

少年は吐き捨てるように言うと、リビングのやたら豪華なソファに腰を下ろした。

それから、優雅な仕草で足を組んで、立ちっぱなしの私を横目で見ながら言った。

「さて…と。まずは名乗らせて貰おう。」

我はワタリユスカル王国、第一王子リユーキッドだ。

この国では渡里竜輝の名で通っている。」

どこだよ、ワタリユスカル！最近の子のごっこ遊び怖っ！

…とりあえず、私は大人として彼の話に付き合ってあげるべきなのかな。

「では、本題に入ろう。我を助けた礼にお前は何を望む？」

「…いいえ。私は何も望みません、殿下。」

「何もという事は無いだろう。金か？宝石か？それとも地位か？」

「そんなもの、余計貰えませんっ。」

「敢えて言うなら、感謝の言葉だけ頂ければそれで充分です。」

「……………お前、本気か？」

「本気です。別に私、見返りが欲しくて助けたわけじゃないですから。」

少年の訝しがるような眼差しを私はまっすぐに見つめ返した。

ふと少年が面白そうな笑みを浮かべて口を開こうとしたその時、傍に置いてあった大きな鏡が虹色に輝いて、中から一人の男性が現れた。

「って、ええええええええ！？ちよっ、何ソレ！？」

男性は私のことをチラリとだけ見やると、すぐに少年に視線を向けて問いかけた。

「殿下。この女性は何？」

「妃候補だ。」
「はあ!？」

さらりと少年が口にした言葉に驚愕して素っ頓狂な声を出してしまふ。

「…どうやら話通っていらっしやらないようですが、ご説明は？」
「まだだ。我も今決めたばかり故な。」

「そうですか。それでは僭越ながら私からご説明させていただきま

す。
そうですね。まず、我々はこの世界とは違う次元に位置する別世界に存在する者です。」

わあい! ついに地球どころか世界すら飛び越えたよ! 次元の壁仕事しろーッ!!

その後も説明は続き、王国は大陸で一番大きな国だとか、魔法や亜人が存在するファンタジーな世界だとか、聞きたくもない事を色々聞かされてしまいました。

で、王族は見聞を広めるために地球へ1年間留学的な事をさせられるらしい。

その際、こちらの女性を見染めて連れ帰り妃にすることも珍しくないようで、私もご多分に漏れず殿下に気に入られてしまったんですってよ。ナンテコッタ。

しかも、殿下は「留学中は子供の姿で」って決まりがあるから魔法で変身してるだけで、本当は17歳とのこと。

元の姿に戻ってくれやがった殿下は…死にたくなるくらい的美形でございました。

少年の正体を知った私は、お断りの言葉を叫びながらダッシュで自宅まで逃げ帰ったんだけど…。

その30分後、なぜかアツサリ家をつきとめられた。

へー、追跡魔法ですか。そうですか。ガッデム！

以後、殿下は留学期間中に説得してみせるとか何とか言って、頻繁に私を訪ねて来るようになった。ちやいました。

ひーん！異世界なんか嫌いよ、ビビデバビデブー！！

エピソード

とある日曜日の事。

玄関を開けると、そこは地獄だった。

「噂で聞いた生徒会長のお気に入りってのは遠坂の事だったのか…。」

「」

「噂…ね。僕と彼女は生徒会ではすでに公認の仲だよ。知らなかった？」

「つか、先生が女生徒の家を個人的に訪ねるとかヤバくねえんすか？」

「おー、抜かりは無えぞ。試しに学長にチクってみるか？ん？」

「私はマイさんのママさんモ公認の婚約者デスよ！」

「黙れ！トーサカは我のものだ！！」

あまりの光景に一瞬立ちくらみを起こしそうになったが、何とか堪える。

とりあえず、この騒ぎを収めるべく私は大きく息を吸い込んだ。

「…っう・る・さああああい！近所迷惑でしょうが！！」

その声に全員ピタリと会話を止めて私を見た。
深くため息をついて、私は一人ずつに声をかけていった。

「横田会長、平気な顔で嘘をつくのは止めて下さい。」

「やだな、遠坂さん。僕は嘘なんてつかないよ。」

「田崎君、何でここにいるの。」

「あ、いや。俺はたまたま通りがかっただけだ。」

「やつべー！舞先輩って、超モツテモテなんツスね！！

しかも全員レベルくそ高えんスけど！うっは、マジやべー！

俺、何気にピンチじゃねツスカ！？」

「…。」

「坂下先生、今日は手伝いは無いように伺ってましたけど。」

「ん？ああ、無えよ。」

たまにやあ礼でもしてやろうかと思って来たんだが…なあ？」

「カミーユさん？私がいつ貴方と結婚の約束をしましたか？」

「う…。でも、ママさんが、…イエ…：…ゴメンなサイ。してません
でした。」

「でん…竜輝くん、何度来られても私は貴方と一緒にには行けません。」

「嫌だ！我はトーサカがよいのだ！諦めなどせぬ！」

「明らかに待ってたくせに通りがかったただけとか、ツンデレ属性スか？」

「はあ？どういう意味だ、そりゃ？」

「学校ノ教員が休日にマデ何の手伝いを頼むと言ウノです。モウ少々立場ヲ考えラレテハ？」

「あん？余計なお世話だ、外人野郎。………それよりお前、本当に人間か？」

「ねえ、ボク？我がママを言っで彼女を困らせちゃいけないよ？」

「…ハッ、貴様程度の男がトーサカに本気で相応しいとも思っておるのか？笑止な。」

うがああああ、もおおおお！！

もうやだ、こいつら！こいつら、もうやだ！

誰か私に平凡人生プリーズ！！！！

エピソード（後書き）

キャラクター補足

横田会長…最初は単なる興味本位だったが、一緒にいるうちに本気になってしまった。

困らせるのは楽しいが、泣かれたりすると一気に弱くなる仮性S。
（舞限定）

田崎…普通に（いつそうザそうに）接してくれる彼女の事が気になつて仕方がない。

振り向いて欲しいのに、好きなことを知られるのが恥ずかしい思春期くん。

植原君…彼女の意外な潔さに漢を見出し、心底傾倒している。

DM体質で、最近はスルーされることにすら興奮を覚えるようになった。（舞限定）

坂下先生…彼女の真面目な性格と、いじりがいのある反応が気に入っている。

会長と違い、泣かれたりすると逆にムラムラしてしまう真性のDS。

カミュー…面倒くさそうにしつつも、ちゃんと相手をしてくれる彼女が好き。

完全に異種族でありながら、軽々とその壁を越えてしまった変態。

竜輝くん…無欲さとまっすぐな気性を持ち、自分を特別視しない彼女に惚れ込む。

子供でいることに慣れすぎたのか、言動が少々幼稚化傾向にある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6272s/>

キミの秘密を知っている

2011年9月18日20時06分発行